

畑中武夫氏を悼む

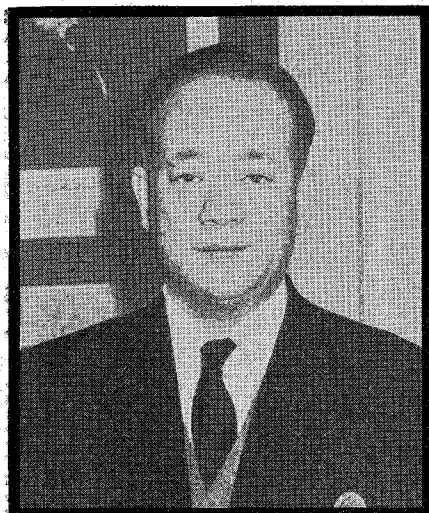
弔 詞

畑中武夫氏は東京大学理学部天文学教室および東京天文台において、数々の優れた研究業績を残され、また、新しい分野の開拓と後進の指導に努められ、その御活躍はひとり我国のみならず広く世界の学界から注目されるところとなっております。日本天文学会には昭和 17 年以来、長年にわたり理事として、あるいは、評議員として、本会の発展に努められ、殊に欧文報告の発刊とともにその編集に多大の尽力をされました。近年宇宙科学の異常なる進展に伴い、各界の氏に寄せる期待の極めて大きかった折柄、氏の御逝去はまことに痛恨に堪えません。ここに謹んで哀悼の意を表します。

昭和 38 年 11 月 12 日

日本天文学会理事長

一 柳 寿 一



若い頃の畑中さん

宮本正太郎*

畑中さんにはじめてお目にかかったのは確か広島で物理学会のあった時かとおもう。昭和 13 年か 14 年で、当時はまだ天文学会の年会などというものはなく、物理学会の一分科として天文関係の者が集っていた。畑中さんと私は卒業が 1 年ちがいで、大学はちがっていたが同じ方面のことをやっていたので同級生のような感じを持っていた。当時東京では萩原先生が惑星状星雲の研究をはじめられ、長沢さんや畑中さんが若手の協力者として活躍していられた。京都では荒木、栗原両先生が特異星を手がけておられ、私も惑星状星雲と取り組んでいた。私の最初の論文を東京の談話会で紹介して下さったのも畑中さんであるし、のちにコロナの電離論が不評であった時にも、畑中さんは認めて下さった。こんなわけで、広島でお目にかかった時をはじめでのような気がしなかった。やせ型で長身で、研究の話をしても至極ひかえ目であった。はや口で少しどもりがちなような話し振りは後年と変っていない。もう一つ変っていないのはあの丸っこい字である。

畑中さんはたしか惑星状星雲の研究で学位をとられたし、私も同様である。このあたりまで同じ方向の仕事をしていたが、次第に戦争がはげしくなり、生活にかまけ

てつきあいがうすれてきた。あとでできると畑中さんは胸の病気をされたようである。戦争が終って間もなく、下鴨の拙宅にひょっこり訪ねて来られたときは嬉しかった。お互に生き残ったことが感慨無量であった。畑中さんの太ってられるのには驚いた。奥さんのお里が吹田だとかで関西に来られたようである。私も吹田へ一度伺ったりしたことを覚えている。萩原先生のすすめで当時生れたばかりの電波天文学に転向されたのはこの頃である。私は戦時中電離層の研究などしていたが、終戦と共に再び天文学にかえり、花山天文台で働くようになってから惑星研究に転じた。こんなわけで、畑中さんとおつき合いは次第にうすれてきたが、その活躍ぶりは田舎にいてもよく噂にきいた。たまに宴会の席で一緒になると、酔うほどに彼はよく兄弟分の盃をしようといって盃をほしたものである。それも一度か二度ではなかった。私だけでなく、畑中さんには誰でも兄弟分になるような人なつこい面があったと思う。

宇宙時代のはじまった頃、畑中さんはすでに天文学界だけでなく、我国の科学界の代表的存在となっておられた。宇宙研究を通して、畑中さんと再び密接なおつきあいははじまりかけて喜んでいるやさき、おしくも急逝された。この思い出の記を書くことが畑中さんとの最後のおつき合いになるとは淋しいことである。

* 花山天文台